芙園

02

児玉源太郎顕彰会会報 第2号

巻頭言

来年、平成30年は明治１５０年にあたります。山口県ではさまざまな記念事業が企画されます。幕府を倒して新政府を樹立した長州から見れば明治維新１５０年ということになります。

維新胎動の地、萩城下では吉田松陰の「松下村塾」で学んだ木戸孝允や高杉晋作、久坂玄瑞、伊藤博文、山県有朋らが幕末から明治にかけて活躍しましたが、毛利支藩の徳山藩士として生まれ、明治の近代化を推進した一人の男がいました。軍人、政治家として活躍した児玉源太郎です。

台湾の第４代総督として民政長官の後藤新平の力を得て近代化を進め、日露戦争では大局的な観点から勝利に導き、早期の講和条約に持ち込んだ立役者でした。

昨年は彼の没後１１０年。児玉源太郎を詳しく知る世代はもう80～90代です。戦後まもなく生まれた団塊の世代も70歳に差し掛かろうとしています。これが最後のチャンスだと地元の有志が昨年６月９日、周南市文化会館内の周南文化協会に事務局を置いた顕彰会を起ちあげて１年が過ぎます。会員は全国に６００人の輪を広げ、児玉源太郎の功績を称え、そこから学んで社会へのご奉公を、と考えています。

高度経済成長を経て成熟の時代、国際化の時代の中で世界は混迷を深めています。アメリカではトランプ政権が誕生、欧州でもＥＵの維持か離脱かをめぐって国論を２分しています。難しい世界情勢の中での国のあり方、国の役割を真剣に考えざるを得ません。平和と安定なしには個人の幸せも保証されません。

児玉源太郎は第４次伊藤博文内閣で陸軍大臣、第１次桂太郎内閣で内務大臣、文部大臣を歴任し、政治家、経世家としても活躍、伊藤の次の内閣総理大臣候補にも名前が挙がるほどの人物でした。近代化推進の政治局面にはいつも彼がいました。私心を捨て、日本や世界の針路はどうあるべきかを常に考えていました。

児玉源太郎が生きていればどう舵をきるのだろうか。「歴史は、現在と過去との対話である」と卓越した歴史家、Ｅ・Ｈ・カーは述べます。対話するとは、その時代に立ち返って時代を認識することです。時代に立脚して歴史を見つめ、多くの顕彰会会員とともに学びながら日々の実践を積み重ねたいと思います。それは未来へ希望をつなぐ架け橋になるための活動です。

※Ｅ Ｈ カー　１８９２～１９８２年。エドワード ハレット カー。英国の歴史家、外交官、論説記者。

児玉源太郎顕彰会会報「藤園」
第2号

2017年6月10日

題字「藤園」は児玉源太郎の号で本人の直筆です。

目次

	巻頭言	
小川　亮	構想を練る　— 顕彰会の役割と使命 —	1
有田　順一	君等諸君へ　— 児玉源太郎の訓話 —	2
森重　祐次	人間児玉源太郎	4
小林　道彦	児玉源太郎ゆかりの地を訪ねて　—熊本城とその周辺 —	6
花田　佳子	児玉源太郎と島田蕃根	8
山下　武右	児玉源太郎顕彰会1周年に寄せて　明治天皇と児玉源太郎は同い年	10
周南市教育委員会 生涯学習課	「児玉源太郎資料調査事業」について	11
中村　和行	日月潭	12
藤井　英雄	みなさまと台湾を訪ねてみたいもンです	14
紙矢　健治	『台湾澎湖女婿』の語る児玉源太郎子爵の面影（1991-2017 台湾）	16
吉原　雍	青年時代（前期）の源太郎［ドラマ風］	20
石川　良興	大連への旅 — 児玉源太郎の足跡を訪ねて —	21
中島　進	先ずは市民向け発信を！	26
中村　光子	不思議なご縁　後藤新平のお孫さんと	27
田口さやか	一個の児玉源太郎	28
長沼　孝雄	児玉公園を中心とした 新京の思い出	30
柴山　佳夫	「児玉源太郎大将と日露戦争」と私の想い	32
	源太郎「余聞」	
西﨑　博史	歴史への扉 — 1年間を総括して —	33
	「会報」表紙の騎馬像の紹介　松本久美子（周南市美術博物館学芸課長）	34
	児玉源太郎略年譜	36
	編集後記	38

構想を練る
―顕彰会の役割と使命―

児玉源太郎顕彰会 会長
小川 亮
（元徳山市長）

念願であった児玉源太郎顕彰会を設立して早や1年が経とうとしています。没後110年の記念すべき昨年6月9日、このまちの懸案であった顕彰会が動き始め、会報やニュースレターの創刊、記念式典や記念講演会の開催などさまざまな活動を展開してきました。

全国へ呼びかけた会員は札幌から福岡まで600人にも及びました。皆様の心温まるご支援、ご協力に深く感謝いたします。1年目としては十分な活動が出来たと考えています。継続していく顕彰会が110年間も生まれなかったことを思うと感慨深いものがあります。

児玉源太郎の号から命名した会報「藤園」をいち早く創刊、10月8日の記念式典でお届けしたのをはじめ、12月10日の記念講演会では北九州市立大学の小林道彦教授（日本政治外交史）に伊藤博文と児玉源太郎の果たした役割について示唆に富んだ歴史の断面を教えて戴きました。3月にはこれまでの活動を紹介したニュースレター「本丁通信」を創刊、会員の皆様にお知らせいたしました。まずは順調に運営出来ましたことを心から嬉しく思います。誠に有り難うございました。

さて、平成29年度は2年目に入りました。2年目から3年目にかけては真価を問われる年になります。将来へ向けてしっかりとしたレールを敷くことが出来るかどうか。その成否が掛かります。6月の総会を経て事業計画と予算は正式決定しますが、今年度は児玉源太郎の命日7月24日にちなんだ「藤園忌」を新しく企画したいと考えています。

児玉源太郎は明治の軍人、政治家として活躍しましたが、ふるさとにおいては私財を投じて私設図書館「児玉文庫」をつくり、「児玉文庫」は明治から大正、昭和を通じて1945年の戦災で焼失するまで郷土の子弟の教育に大きく貢献しました。

顕彰会では文化的な視点から児玉源太郎の仕事とその役割を明らかにして明治の近代化を成し遂げてきたその群像から歴史を学んで次世代の人材を育てて行ければ嬉しい限りです。彼が屋敷の一角に結んだ「三五庵」の復元も視野に入れた児玉源太郎記念館の構想など、将来へ向けた展望も模索して行きたいと考えています。

この顕彰会は百年先を見据えて活動を展開しています。没後110年にしてようやく起ちあげることが出来た顕彰会の力強い活動が将来への希望の灯りを点しました。周南市も29年度児玉源太郎資料調査事業として新規予算を組みました。3か年継続事業として美術博物館、中央図書館と情報を共有し、連携を深めてもらいたいものです。

顕彰会もまたそれに連携することで有機的な形を整え、次のステップへと発展させていきたいと思います。引き続き、皆様方の力強い応援をお願いいたします。

（平成20年撮影）

小川 亮（おがわ まこと）

大正13年山口県徳山町（現周南市）に生まれる。徳山中学校、第一高等学校文科を経て昭和23年東京大学法学部卒業。

人事院、自治省勤務を経て福岡県水産、地方、財政の各課長、徳島県企画開発部長、自治省消防庁予防課長、財政局指導課長、新潟県総務部長、自治省税務局固定資産税課長。

昭和50年4月から岡山県副知事、昭和54年4月徳山市長に就任。平成11年4月に5期20年務めて退任。昭和58年全国市長会工業整備特別地域都市協議会会長、平成6年6月から全国市長会副会長。

平成9年11月自治功労により自治大臣表彰。平成12年4月勲三等旭日中綬章、同年10月徳山市政功労特別賞。

【著書】
「市長随想 銀杏並木の散歩道」「市長随想 桜並木の散歩道」「市長随想 私のふるさと とくやま」「回想−徳山市長二十年」

歴史への扉
―一年間を総括して―

児玉源太郎顕彰会 事務局長
西﨑博史
（周南文化協会会長）

悲願の児玉源太郎顕彰会が動き始めて1年。没後110年にして初めて継続できる顕彰会が生まれたことへの感慨と、明治から大正、昭和、平成へと続く今の世に顕彰会を起こすことへの機縁を考えざるを得ません。

1年掛かりで準備して設立した児玉源太郎顕彰会。昨年6月9日設立して以来、会員募集、会報「藤園」創刊、10月8日の記念式典でお披露目、12月10日の小林道彦　北九州市立大学教授（日本政治外交史）による記念講演会、ニュースレター「本丁通信」創刊と走り続けてきました。あっという間の10カ月でありました。

全国へ呼びかけた会員は早速反応がありました。設立総会を報道した日に長門市の男性から「よくぞ起ちあげてくれました。児玉源太郎への評価が低いので腹に据えかねていた」と。続いて札幌市や一宮市の女性からも。一人とも児玉源太郎ファンで小説を書いてみたいとその志を話してくださいました。顕彰会役員30人の働きかけやマスメディアの宣伝などによって10月19日には初年度目標の500人を達成しました。

会報「藤園」創刊号も編集に3カ月、産みの苦しみを味わいながらも10月1日には刊行、記念式典に間に合いました。遠石会館での記念式典では役員はもちろん、顕彰会の事務局を置く周南文化協会の各連盟の応援を得て152人と多数の参加がありました。札幌や東京、大阪、福岡からも会員がかけつけてくださり、大いに励まされました。有り難いことです。

小林道彦教授には記念式典、記念講演会とお世話になりました。日本の憲政史に触れて伊藤博文と児玉源太郎が内閣の機能強化を図るとともに内閣の統制下に陸軍を置こうと考えていたことなどを紹介。この2人がもう少し生きていれば昭和の悲劇は相当の確率で食い止めることが出来たと。興味深いお話でした。

全国に広がった会員の皆様にこれまでの活動をお伝えするためにニュースレター「本丁通信」を3月25日発行しました。研究成果やエッセイなどを掲載する会報「藤園」に対して、顕彰会の活動を中心に報告するのが「本丁通信」です。藤園は児玉源太郎の号、本丁は生家があった場所、本丁の地名から名付けました。

顕彰会は発足して間がなくて専従スタッフもいません。本業を抱えながら役員は関わっています。事務局の周南文化協会も他の文化協会と違って行政から独立して運営しています。「藤園」と「本丁通信」の編集では7人の編集委員が大活躍です。何度も集まって議論を重ねながら作業を進めます。1時間の予定が2時間、3時間にもなります。お互いの知識や経験から新しいアイデアが生まれ、次々と形になっていきます。新聞社や出版社の編集室のようでその雰囲気が大好きです。

大学で歴史を学んだ専門家もいますが、私のように門外漢のものもいます。児玉源太郎を知ることで次から次へと歴史の扉が開かれていく様は知的好奇心を刺激してくれます。児玉源太郎の人生を繙くことで日本の近代史が明らかになっていきます。そしてアジアを知れば世界が見えてきます。この一年を振り返りながら、未来へ希望をつなぐための活動をご一緒にしてまいりたいと強く思います。

児玉源太郎略年譜

1852（嘉永5）	1歳	閏2月25日徳山藩士児玉半九郎の長男として徳山の本丁（現岐山通）に生まれる。幼名百合若。
1856（安政3）	5歳	10月 父半九郎亡くなる。浅見栄二郎の次男巌之丞が養子となり、家督を継ぐ。巌之丞改め次郎彦忠炳と名乗る。次郎彦、源太郎の姉久子と結婚。
1858（安政5）	7歳	7月 藩校興譲館に入学。
1859（安政6）	8歳	8月 次郎彦、暗殺される。源太郎が幼いため家名断絶。
1864（元治元）	13歳	7月 家名復興。中小姓となり、禄高25石を与えられる。元服し源太郎忠精と名乗る。
1865（慶応元）	14歳	10月 馬廻役、禄高100石を許される。
1868（明治元）	17歳	献功隊二番小隊半隊司令士として二田尻より出陣し、秋田土崎港に上陸、青森に向かう。
1869（明治2）	18歳	五稜郭の戦いの後、6月 東京に凱旋する。
1870（明治3）	19歳	8月 兵部省御雇でフランス式兵学修業を命じられ、京都二條川東第一教導隊に入り、11月に大阪兵学寮に移る。
1871（明治4）	20歳	2月 脱隊騒動を鎮定。6月 兵学寮を卒業し、大隊第六等下士官に。12月 陸軍権曹長に任じられる。4月 陸軍准少尉に任じられ、第二連隊第二大隊副官となる。8月に陸軍少尉、9月に陸軍中尉（写真①）に任じられる。
1872（明治5）	21歳	7月 陸軍大尉に任じられる。8月 大阪鎮台地方司令副官心得となる。
1873（明治6）	22歳	3月 大阪鎮台歩兵一大隊近衛へ編入に伴い上京。
1874（明治7）	23歳	2月 総督野津陸軍少将の参謀渡辺少佐の随行員として佐賀派遣を命じられる。佐賀の乱で銃傷を受け、福岡仮病院で療養。（写真②）4月 大阪に移り療養。8月 熊本鎮台准官参謀となる。10月 結婚。陸軍少佐に任じられる。
1876（明治9）	25歳	8月 歩兵分遣隊巡視のため琉球へ派遣される。10月 神風連の乱。11月 神風連の乱の顛末報告のため上京。
1877（明治10）	26歳	2月 西南戦争に出征、熊本城中に籠城。5月 熊本馬見原に戦い、熊本各地を転戦。10月 熊本城に凱旋。
1878（明治11）	27歳	2月 熊本鎮台参謀副長を免ぜられ、近衛局出仕となる。麹町区富士見町に住む。3月 熊本鎮台残務取纏御用兼務を命じられる。12月 勲功調査御用掛兼務を命じられる。
1879（明治12）	28歳	1月 陸軍始分列式の参謀を命じられる。5月 西南戦争での軍旗奪取の報告遅延の科により謹慎3日。7月 陸軍参謀となる。10月 天長節飾隊式諸兵参謀を命じられる。12月 イタリア皇族御迎引飾隊式の際の参謀を命じられる。
1880（明治13）	29歳	4月 歩兵中佐（写真③）に任じられ、東京鎮台歩兵第二連隊長兼佐倉営所司令官となる。
1883（明治16）	32歳	2月 歩兵大佐（写真④）に任じられる。
1885（明治18）	34歳	5月 参謀本部管東局長となる。7月 西部検閲使属員を命じられる。参謀本部第一局長となる。12月 明年陸軍始観兵式諸兵参謀長を命じられる。
1886（明治19）	35歳	3月 歩兵操典並に鍬兵操典取調委員、臨時陸軍制度審査委員となる。4月 戦時衛生事務改正委員となる。5月 砲兵隊編制審査委員となる。7月 士官下士官進級下調委員となる。9月 陸軍大学校幹事を兼務。10月 軍用電信材料改良委員となる。
1887（明治20）	36歳	2月 陸軍職工所編制審査委員となる。4月 士官下士官進級下調委員となる。6月 監軍部参謀長となる（兼職はもとの通り）。10月 陸軍大学校長を兼務。

① 中尉時代

② 佐賀の乱で負傷

③ 歩兵中佐時代

④ 歩兵大佐時代

1888（明治21）37歳　1月 陸軍将校生徒試験委員長を兼務。

1889（明治22）38歳　5月 輜重兵監缺員中臨時輜重兵監職務取扱となる。第二師団特命検閲使属員となる。8月 陸軍少将に任じられる。

1890（明治23）39歳　3月 陸海軍大演習見学。9月 戦用器材審査委員となる。近衛、並びに第一、第二、第四師団特命検閲使属員となる。

1891（明治24）40歳　10月 視察のためヨーロッパへ出発。

1892（明治25）41歳　8月 ヨーロッパより帰国。陸軍次官に任じられ、陸軍省軍務局長を兼務。11月 鉄道会議議員、陸軍省所管事務政府委員となる。

1893（明治26）42歳　4月 理事兼務。高等官一等に叙せられ、陸軍省法官部長となる。5月 出師準備品目数量取調委員長、出師準備品保管出納及検査方法取調委員長となる。8月 輜重車輌審査委員長となる。11月 陸軍省所管事務政府委員となる。

1894（明治27）43歳　3月「友ケ島第二砲台設計に係ル」砲工合同会議議長となる。

1895（明治28）44歳　7月 村田連発銃戦時弾薬数額及徒歩兵各装具調査委員長となる。8月 日清戦争勃発。9月 参謀本部御用取扱兼務。10月 陸軍省所管事務政府委員となる。12月 大本営所在地へ派遣される。

1896（明治29）45歳　2月 大本営所在地へ出張。3月 大総督府派遣中大本営陸軍参謀となる。4月 臨時陸軍検疫部長を兼務。4月 日清講話条約調印。6月 参謀本部御用取扱兼務、鉄道会議議員を免ぜられる。臨時台湾電信建設部長、臨時台湾燈標記建設部長を兼ねる。台湾事務局委員となる。11月 臨時広島軍用水道布設部長兼務。12月 陸軍省所管事務政府委員となる。

1897（明治30）46歳　5月 願いにより兼官を免ぜられる。6月 鉄道会議議員、被服装具陣具及携帯糧食改良審査委員長となる。10月 陸軍中将に任じられる。臨時政務調査委員となる。11月 長崎函館及舞鶴防禦計画審査会議議長となる。陸軍省所管事務政府委員となる。

1898（明治31）47歳　1月 英照皇大后大喪使事務官兼任となる。9月 臨時政務調査委員を免ぜられる。10月 清国威海衛に派遣される。12月 陸軍省所管事務政府委員となる。

1900（明治33）49歳　1月 第三師団長に任じられる。2月 台湾総督に任じられ、第二師団長を免ぜられる。

1902（明治35）51歳　12月 第四次伊藤博文内閣の陸軍大臣を兼務。（写真⑤）

1903（明治36）52歳　3月 願いにより陸軍大臣を解かれる。12月 河野通好を代理人として私立児玉文庫の設立を文部大臣に申請。1月 児玉文庫開庫式を挙行。6月 ヨーロッパ、南アフリカ及びアメリカへ出張。

1904（明治37）53歳　7月 第一次桂太郎内閣の内務大臣（写真⑥）に任じられる。文部大臣を兼務。9月 文部大臣兼務を免ぜられる。10月 内務大臣を免じられ、参謀本部次長（写真⑦）となり、台湾総督専任となる。2月 ロシアに宣戦布告。2月 大本営参謀次長兼兵站総監となる。6月 陸軍大将に任じられる。6月 満州軍総参謀長となる。7月 東京を出発し、清国青泥窪（ダルニー）に上陸。9月 旅順に向かう。辞表を提出するが却下される。

1905（明治38）54歳　2月 奉天占領。3月 戦況奏上のため帰京。5月 遼東守備軍司令官臨時事務取扱を命じられる。満州総兵站監兼務。9月 日露講話条約調印。11月 大連を出帆。12月 宇品に上陸し、帰京。参謀本部次長事務取扱を命じられる。

1906（明治39）55歳　2月 明治37、38年戦役第一勲績審査委員となる。4月 参謀総長となる。願いにより台湾総督を免じられる。子爵を授けられる。陸軍勲功調査委員となる。明治37、38年戦役陸軍凱旋観兵式諸兵参謀長となる。7月 南満州鉄道株式会社設立委員長となる。7月24日亡くなる。正一位に叙せられる。

⑤ 陸軍大臣兼務時代

⑥ 内務大臣時代

⑦ 参謀本部次長時代

児玉源太郎顕彰会